

適切なアセスメントの活用

アセスメント(1)

- 標準化された発達検査です。
 - ・田中ビネー式知能検査 ・WISC ・新版S-M社会生活能力検査 等
- 自閉症の障害特性に応じた検査
 - ・太田ステージ ・PEP ・自閉症の7つのキーポイント 等

アセスメント(2)

- 授業の記録や、学校で使用しているチェックリスト等を指します。
 - ・進路指導で広く活用されている就労準備チェックリスト 等

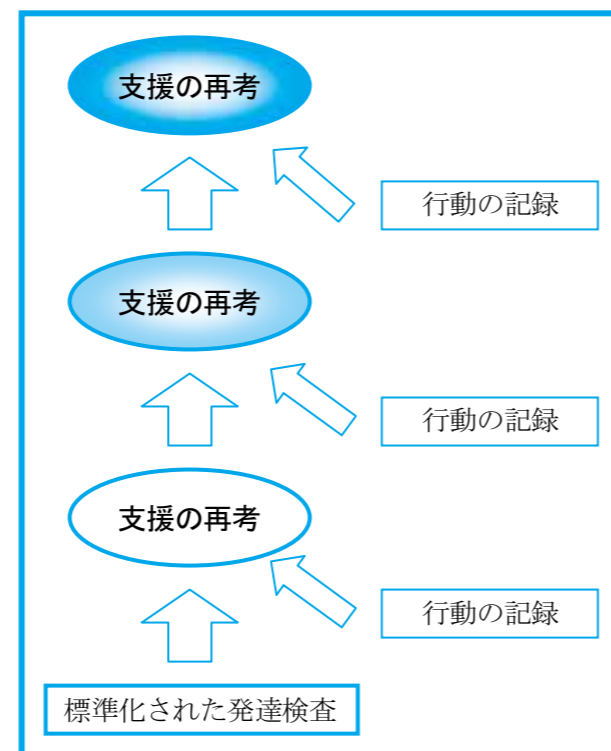
アセスメントの組み合わせと繰り返しが大切

標準化された発達検査の結果は、生徒の得意・不得意を知るものです。検査の結果を生徒一人一人への適切な支援につなげるためには、得意や不得意に対して行った支援の方法や内容に関する行動記録等を基に、成果について複数の教員が話し合い、様々な視点から支援の方法や内容の再考することが必要不可欠です。

本事業の中で専門委員より紹介された「TTAP(自閉症スペクトラムのアセスメントプロフィール)」も、標準化された発達検査と現場実習等の日ごとの記録等を含んでいます。

また、標準化された発達検査の実施に際しては、それぞれ検査に適した児童・生徒の知的障害の状態、生活年齢、操作性などがあります。

適切な児童・生徒の実態把握のためには、適切な発達検査を実施することが、大切です。



実践例

- 日常生活指導に関する指導事例
- 自閉症の生徒で編成した学級の指導事例
- 作業学習「食品加工班」の指導事例
- 自閉症の生徒を集めた「事務作業班」の指導事例
- 移行支援施設B型と連携した現場実習の指導事例
- 知的障害が軽度の生徒の現場実習に向けた指導事例
- 中学部と高等部の引継ぎに関する事例

資料

- これまでに作成・配布した自閉症教育推進の関係資料

「日常生活の指導」に関する指導事例

生徒Aの実態

- 高等部第3学年 男子生徒
- 自分から周囲の人に話しかけることはほとんどないが、話しかけられれば簡単な質問等に答えることができる。
- 注意されたり、訂正されたりすることに敏感で、情緒が不安定になることがある。

実施したアセスメント等と結果

TTAPの結果

- ほとんどの課題を行え、課題が見当たらない。

WAIS-Ⅲの結果

- 文脈に沿った言語理解が難しい。
- 短期記憶が優れている。視覚情報で理解するほうが得意である。

アセスメントから分かった必要な支援

- 言語以外のコミュニケーション方法を考え、使用方法を提示していく。
- ルールを明確に表示し、活動手順や目標を具体的に示して確認する。
- 円滑な行動を促すために、活動を選択できるようにして、教員間で関わり方を共通理解する。

「日常生活の指導」の指導内容・方法の工夫及び配慮点

コミュニケーションの指導方法の工夫

<コミュニケーションツールの工夫>

右写真のような「カード」を用意し質問や指示が理解できない時、自分の言葉で答えられない時にはカードを提示するルールを決めた。



<指導の工夫>

学級の一斉の指導場面で、“発言ボード”を用意し、発言が終わった人を視覚的に捉えられるようにした。

<発言した人>

- Aくん
- Bさん
- Cくん



○生徒自身が選択するような提示の工夫

生徒Aの行動や回答に訂正や修正を加える時は、修正前と修正後の状態を両方提示し、「どちらのほうがやりやすい？ よいと思う？」など、問い掛けや選択肢の提示を行う。

生徒Aの変化

- カードを示すことで友人が生徒Aの状況を理解でき、必要以上の関わり等が減ったことで、行動の安定につながった。
- 発言ボードにより自分の発言順に見通しがもて、主体的に授業に参加できるようになった。
- 選択肢を介した教員とのやり取りによって助言を受け入れられるようになり、情緒が不安定になる場面が減った。



研究でわかったこと

- 生徒が簡単な質問に答えることができても、言語指示のみでは十分な理解をできない場合があり、確実な理解ができているかをアセスメントする必要がある。
- カードなど、意思表示を促せるツールを使用することによって、教師や他の生徒に意思が伝わる経験を積むことにより、感情の起伏を少なくできる。
- 高等部では、教科ごとに担当する教員が異なる。教師間で生徒の指導方法に関する共通理解を図り、生徒への関わり方を統一することで、指導や支援の効果が高まる。

今後の課題

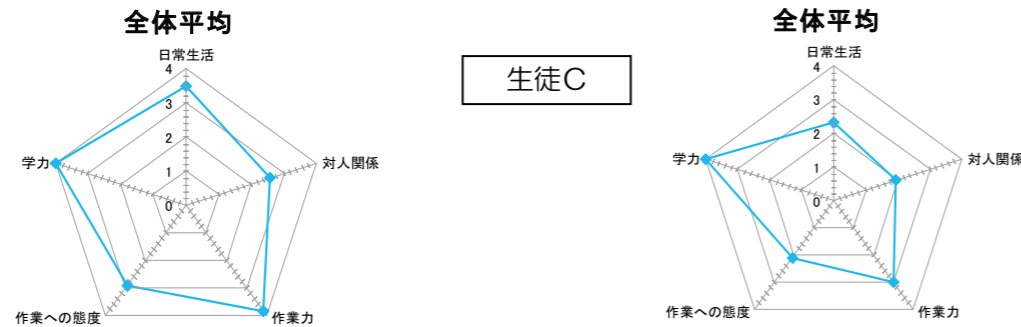
- 意思表示のためのコミュニケーションツールを増やしていく。
- 進路先に生徒のコミュニケーションの実態やコミュニケーションツールの活用状況を伝え、移行支援に生かしていく。

「自閉症の生徒で編成した学級」の指導事例

研究指定校Aにおいては、自閉症の生徒による学級を編成し、高等部における自閉症の生徒の指導内容・方法の研究を深め、その成果を他の学級の指導に生かすという研究を行った。

対象生徒の実態

下のレーダーチャートは、高等部2年の自閉症の生徒で編成した学級に在籍する生徒2名の「就労準備チェック表」によるアセスメントの結果である。



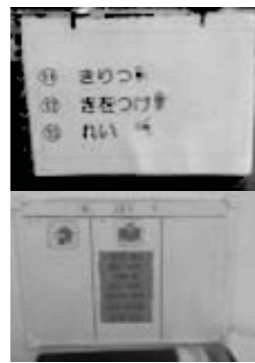
日常生活、対人関係、作業力、作業への態度、学力のバランスは同じような傾向を示している。また、他の生徒も同様な傾向があるため、集中力や整理整頓などの「作業への態度」を引き上げるような指導の工夫を行う必要がある。

自閉症の生徒で編成した学級の指導内容と工夫及び配慮点

日常生活の指導

朝の会や帰りの会では、一連の活動内容を視覚的に提示し、司会の生徒はせりふを読むことで、朝の会や帰りの会をできるようになった。

また、授業と授業の間の時間は生徒がいくつかの課題を選択することで、自席で落ち着いて過ごすことができるようになった。昼休み等の時間も生徒一人一人が落ちついて過ごせるようになった。



保健体育

朝の体力づくりは、姿勢や体の向きが分かりやすいように、椅子に座って行うようにした。運動は、教員の動きを模倣すること、相手の指示を聞き取ることなどをねらいとして指導内容を組み立てた。

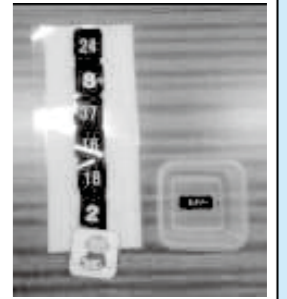
身体動作の模倣だけでは、腕をまっすぐ伸ばすことが難しい生徒が多かったが、タオルを用いることで、どこまで、どのように腕を伸ばすのかを分かりやすくした。



国語及び数学

生徒一人一人が時間内、集中して課題に取り組み、1単位の時間内で充足感を味わえるように、時間内に終えることのできる課題の量を設定した。

また、生徒によっては、課題の最後に本人の得意な課題を用意することで、意欲的に学習に取り組めるようにした。



成果

自閉症の生徒を集めた学級としたことにより、自閉症の障害特性に応じた指導内容・方法の研究に集中して取り組むことができ、生徒の成長につながった。

他の学級における指導への展開

担任間で意見交換をし、自閉症の生徒で編成した学級と、他の学級の教材の準備方法、配置等についての違いを比較検討した。

例えば、物を分類する学習内容においても、生徒一人一人の実態に応じて、指示書の内容を変えるなどの工夫を自閉症の生徒の指導に取り入れた。

スプーン、フォークを仕分ける課題では、手掛かりをイラスト、色シールなど、生徒一人一人の理解の方法に応じて教材の準備に生かした。



2年間のまとめと今後の課題

1年目の自閉症の生徒を集めた学級の研究成果を、他の学級に広げられたことは有意義な研究活動であった。具体的な高等部段階の自閉症の生徒に対する指導内容・方法に関する検討を更に多くの教員間で行なうことにより、研究成果の普及・定着を図っていきたい。



作業学習「食品加工班」の指導事例

対象生徒の実態

- 高等部3年生 男子生徒D
- 言葉による簡単な指示を理解することができ、単語や2~3語文で相手に要求を伝えることができる。
- 普段は温厚で、笑顔が多く見られるが、時折こだわりがあり、行動停止や反復、情緒不安定が顕著になる。

実施したアセスメント等と結果

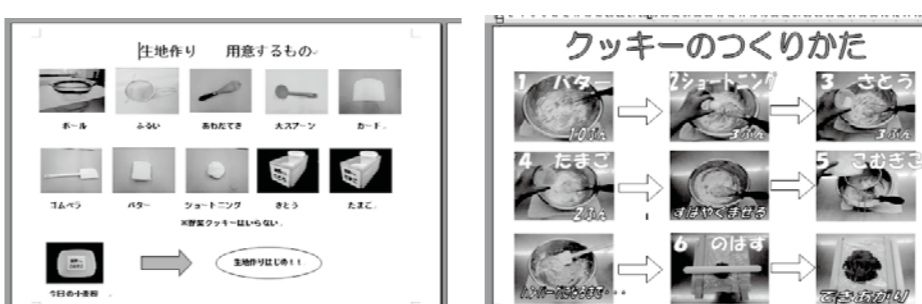
- ① TTAPの結果
 - ・言語指示への理解は弱い。
 - ・文章カードの理解が高く、指示書が分かる。
 - ・本を読むなどして、自由な時間を過ごせる。
 - ・生徒Dのもつ技能等に対して、検査結果よりも家庭や学校での評価が低い。
- ② WAIS-Ⅲの結果
 - 「算数」、「数唱」と音声記憶に優れている。
 - 視覚支援が有効であるが、イラストより、具体物の方がより有効である。
 - パターンを覚えるのが得意である。
 - 誤学習すると、修正が難しい。
 - 動作性の方が優れていると言える。

「食品加工班」の指導内容・方法の工夫

○工程ごとに工程分析表を活用して指導

作業内容	工程分析	自閉症生徒に考えられる困難	支援の工夫
身支度	① 白衣の着脱 ② 帽子の着脱 ③ マスクの着脱 ④ サンドルの着脱	・何をどのように身につけたらよいのか(片付けたらよいのか)わからない	・名入れハンガー(a) ・帽子、白衣カゴの利用
道具の準備	① 今日の自分の作業内容を確認する ② 自分の作業場所の台を布巾で拭く ③ ボウル、ざる等必要な道具と材料を揃える	・自分が担当する作業内容が分からない ・自分がどの場所で作業を行なうかわからない ・どの道具が必要かわからない ・どの材料が必要かわからない	・作業内容をホワイトボードに表示する(b) ・取り出しやすい棚の工夫(c) ・道具・材料準備表(d)
計量	① 道具、材料を準備する ② 各材料を計りにのせ、重さを量る ③ 重さがあっているか報告し確認する	・何を準備すればよいかわからない ・重さがいくつかわからない	・計量マニュアルの利用 ・容器への材料名、生徒

○「生地づくり」の工程に固定して、安定してできる。



- 工程を更に細分化することで、一人で取り組めるようになる。
- 使用する道具も写真で表示する。

さらに改善

行動の記録

小麦粉、バター、砂糖を分割して加える部分だけは、教員の指示を待ち、一人で進めることができなかった。

はじめから分けておこう



○「生地づくり」の材料を三分割して準備する工夫を加えた。



一人でできるようになった。



今年度の研究でわかったこと

Dさんは徐々に各作業に見通しがもてるようになり、主体的に活動する場面が増えた。昨年度他の作業班では、当初教員が1名付き添い、言葉掛けを中心に指導していたが、環境を整えることにより、一人で次の仕事に向かい、課題を達成できるようになった。また、食品加工班では、レシピとタイマーの利用により、記憶力に優れている自閉症の生徒は、すぐに手順を覚えることができる。



今後の課題

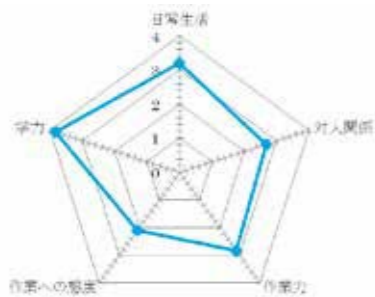
Dさんの成長を客観的に確認するため、TTAPによるアセスメントを再度取り直したところ、多くの項目で伸びが認められた。特に本生徒の学校でのコミュニケーションに関する伸びが著しい。「一人でできる」自信や、予定確認を通しての「伝わる」成功体験が、こうした結果につながっていると考えられる。

今後の課題は、Dさんの能力や支援の有効性について、進路先に上手く引き継ぐことである。サポートブックの作成などを通し、進路先との連携を図っていきたい。

「自閉症の生徒を集めた事務作業班」の指導事例

対象生徒の実態（高等部1年生 男子生徒E）

就労準備チェックリストによるアセスメント



TTAP の検査結果

- 休憩時間の過ごし方や周囲の人に自分の意思を伝える方法などに支援が必要となる。
- 一人で作業する力はあるが、人と一緒に活動には配慮が必要となる。
- 生徒Eが自分のペースで行える作業を設定する。

自閉症の生徒を集めた事務作業班の指導内容と工夫及び配慮点

一人で作業ができるようにする支援

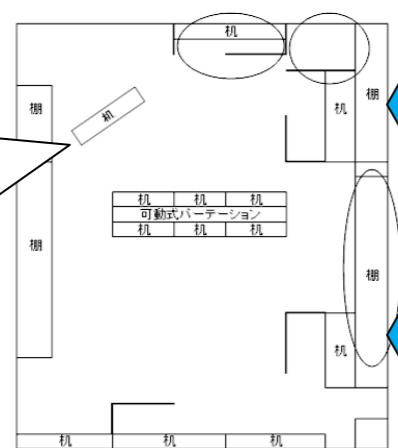
生徒が手元にある手順書を見て、作業時間の見通しがもちやすいように配慮した。この支援により、立ち歩きがなくなり、60分の作業時間を集中して最後までやり切れるようになった。

支援を行う前は100枚程度だった作業量が、使用後は300枚まで増加した。



作業環境の整備

- 整理整頓された教室
- 新しい作業を始める場合に教員との1対1で練習をする場所



休憩時間に過ごす空間



生徒が準備・片付けができる棚

補助具

作業学習開始当初、線に沿ってはさみで紙を切る作業を行うと、不良品が多く出ていた。そこで、切り取った製品を補助具に並べ、規格通りに作れたかどうかを確認するよう促したこの指導により、不良品はほとんどなくなった。



成果

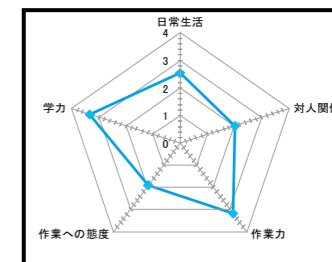
○生徒Eは、生産量が上がるとともに、休憩時間等も落ち着いて作業に取り組めるようになった。

他の作業班における指導への展開（高等部2年生 男子生徒F）

縫製班の指導内容・方法の工夫

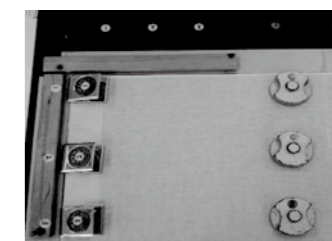
就労準備チェックリストによるアセスメント

学力と作業力が高いが、対人関係と作業への態度が低い。



一人で作業ができるようにする支援

布を切る作業工程において、布を固定する磁石の置き場をシールで具体的に示したことで、自分で磁石を固定しながら作業を進められるようになった。



スケジュール

個別のスケジュールの使用により、何枚切れば良いのか、切り終えた後に何をすればいいのかなど、活動に見通しがもてるようになり、落ち着いて作業に取り組めるようになった。



休憩時間の過ごし方

作業の休憩時間には、落ち着かない様子が見られたが、個別のスケジュールに示されている休憩時間には、トイレに行くことや好きな活動を具体的に示して取り入れた。それにより、休憩時間も落ち着いて過ごすことができ、次の作業にも続けて取り組んでいけるようになった。

2年間のまとめと今後の課題

作業学習における本研究の成果が、生徒の生産量からも検証でき、指導方法の工夫と、作業環境の整備が有効であることが分かった。さらに、その他の作業班でも展開し、自閉症の生徒の分かりやすい作業学習を推進する。